

## 聴覚障害者が働きやすい社会へ

寺師 義和

私は、先天性感音性難聴の聴覚障害者である。現在は、ろう学校で働いている。職場では手話を用いてくれるので、周囲と意思の疎通が出来る。また、朝の打ち合わせや会議でも手話通訳がついているので、内容が分かり意見を言うことも出来る。

生徒とのコミュニケーションも、手話でスムーズに出来る。今の職場では、自分が聴覚障害者であることを忘れてしまうほどだ。

しかし、以前の職場は違った。私は、ハローワークでの障害者採用枠により、ある家電量販店に採用された。といっても正社員ではなく、営業補助員である。いわゆるパート待遇だ。社会保険や交通手当はあるが、時間給でボーナスはない。おまけに退職金も出ない。でも、一生懸命に働けばいつかは正社員に昇級できるかもしれないと思い、一生懸命に頑張った。その家電量販店のメインは接客である。どれだけ売り上げを伸ばせるかが、給料に結びつくと言っても過言ではない。しかし、耳が不自由な私は接客は難しいので、裏仕事の担当になった。値札を作成したり顧客登録のパソコン入力をしたり、トイレの掃除や照明の交換、買い物カゴの手入れもした。

他の職員とのコミュニケーションは筆談だった。朝の打ち合わせや会議には参加しなくてもいいと言われた。私の仕事に関する情報のみ、筆談で伝えてもらう程度だった。それで、職場の情報がなかなか入らなかった。

聴覚障害者は与えられた仕事だけやっていけばいい、そんな感じだった。どんなに一生懸命に働いても給料は全然上がらない。老後の人生設計に危機感を感じた私は、ハローワークに何

度も通って転職先を探した。しかし、不景気の世の中、現在よりもいい職場は見つからなかった。

ある日、新聞で教員採用試験の募集が載っていた。手話講習会の講師などで教えることの素晴らしさと楽しさを実感していた私は、ろう教育の現場で、自分と同じ聴覚障碍児の教育に携わりたいという気持ちが強くなっていった。ところが、教員採用試験を受験するためには、教員免許が必要であることを知った。大学時代は社会福祉を専攻していたが、残念ながら教員免許は所持していない。教員免許の取得方法について、私は悩んだ。今の職場を辞めて教員免許を取得できる大学に入り直すか、今のまま働きながら通信教育で教員免許を取得するか。その時、私はもう36歳だった。若気の至りなど失敗は絶対に許されない。結局、万が一、教員への挑戦が失敗に終わった場合のリスクを考えて、働きながら通信教育を受講することにした。仕事が終わった後、眠い目をこすりながらの勉強。独学で教科書を理解して、毎月レポートを書かなければならない。おまけに、科目最終試験に合格しないと単位がもらえない。まさに、孤独な勉強だった。必死になって取り組み、1年で「中学国語2種」の教員免許を取得した。地元の鹿児島で教員採用試験を受験したかったが、年齢制限のために受験できず。それで、他県を受験することにした。しかし、大阪と長崎の試験に不合格。教員免許を取得するための勉強と採用試験勉強は内容が異なる。働きながら教員免許取得の勉強だけで精一杯の私には、教員採用試験の勉強までこなす余裕はなかった。それでも、毎年、通信教育を続けて「養護学校1種」と「中高国語1種」の教員免許を取得した。教員採用試験は、大阪や長崎以外にも千葉、兵庫などを受験したが、9回連続不合格になってしまった。

39歳の夏、もうあとがない私は、最後の挑戦として東京都教員採用試験に挑戦した。社会人採用枠で受験したので、1次試験は小論文だけだった。小論文は得意だったので合格して2次試験に進んだ。2次試験は個人面接と集団討論だった。ろう教育に携わりたいという熱い思いを全てぶつけた。

そして、運命の合格発表日。インターネットの合格発表掲示板で、自分の受験番号を見つけた時は、思わず涙がこぼれた。

40歳でろう学校に新採用されて、はや8年目を迎える。現在の職場は2校目である。仕事は相変わらず多忙を極めるが、自分の能力を十分に発揮できる喜びを味わっている。

社会では、聴覚障害者が色々な職場で働いている。しかし、3年以内で辞める聴覚障害者が多い。職場のコミュニケーションがうまくいかないことが、大きな原因とされている。聴覚障害者が働きやすい職場は、ろう学校だけであってはならない。職場の人たちが、聴覚障害者のことを理解して、手話や筆談などのコミュニケーション方法に配慮すれば、聴覚障害者自身も意欲的に仕事に取り組む、自分の能力を開発できるはずである。聴覚障害者の職場環境が良くなれば、それは職場全体の向上につながる。

手話言語法が、全国各地の議会などで採択されつつある。手話は、聴覚障害者の言語である。単に手話を使えばいいというわけではない。手話を通じて、聴覚障害者のアイデンティティを認めることが大切である。

「自分を磨き続けなさい」。2年前の春、間質性肺炎という難病で他界した母が、私に遺した最期の言葉である。「生徒たちと共に学び、生徒たちと共に成長する教師を目指したい。」という初心を忘れずに、謙虚な気持ちで更なる精進を重ねていきたい。